佳作

夏がやって来た

福岡県 福岡市立多々良中央中学校一年　谷口 開軌

また暑い夏がやって来た。僕は駆け足である秘密の場所まで行った。そっと覗くと、

「いた、いた。」

とげに気を付けながら手を伸ばして葉の根元を引っ張ると、プチンと音をたてて葉が取れた。葉の上にはモソモソと小さな茶色と白色の幼虫が動いている。ナミアゲハだ。

僕はアゲハの幼虫を毎年育てている。今年もやって来たアゲハの幼虫に会える夏が僕は大好きだ。卵からかえった茶色い小さな小さな幼虫は、脱皮を繰り返して茶色と白の幼虫になる。外敵におそわれないように鳥のふんのぎ態となり、黄緑色の幼虫になると葉へのカムフラージュとなって鳥から捕食されにくくなっている。アゲハの自然の知恵にはおどろかされる。

小さな幼虫には柔らかい若芽と若葉を、黄緑色の幼虫には新鮮な葉を毎日あげた。葉のはじを力強くかんで食べていく幼虫は忙しそうに頭を上下させている。何だかとてもうれしそうに見える。プリッと太く丸みを帯びた幼虫はゆっくりと天井のふたを目指して進んでいく。しばらくすると口から糸を吐き、器用に体に糸を掛けている。

いよいよさなぎになる。皮がむけると幼虫の頃とはちがいゴツゴツとしたさなぎになる。突ついてみると体をひねってピョコピョコと動いている。

一週間から十日間さなぎはじっとその時を待っている。羽化が始まるのはいつも明け方。目が覚めるとさなぎからアゲハちょうとなっている。この日も朝に飼育ケースを覗くと、

「いた。生まれた。」

と僕の気持ちが高ぶった。さなぎからアゲハちょうに羽化をしていた。羽をいためないよう油が乾くようにゆっくりと羽を開いたり閉じたりしている。しばらくすると動きが活発になりケース内をパタパタと飛んでいる。その時が来た。

幼虫が生まれた場所で飼育ケースのふたを開けた。いきおいよく飛び出したナミアゲハは空を目指して迷う事なく飛んでいった。空をまうナミアゲハはとても美しくて何度見ても感動するしゅん間だ。この夏も沢山の幼虫の世話をして、ナミアゲハになったら空に放ちたいと思う。